荒川区 区政改革懇談会 中間発表会
会議録

【日時】
平成 17 年 11 月 23 日

【場所】
サンパール荒川　５階　末広

［会議次第］

１　開会
２　区長挨拶
３　グループ発表
４　区長コメント
５　グループ討議
６　閉会

１：開会

事務局より開会宣言

次第の説明を行い、次に区幹部職員を以下の順で紹介した。

西川太一郎　区長
三嶋重信　助役
大渕義明　収入役
川嵜祐弘　教育長
鈴木尚志　総合企画部長
藤田満幸　経理部長
裸野和男　危機管理対策室長
三ツ木晴雄　地域振興部長
佐藤安夫　産業経済部長
緒方清　環境清掃部長
細川えみ子　保健福祉部長
荒川達夫　都市整備部長
倉門彰　土木部長
友塚克美　教育委員会事務局次長

（司会）
後藤徹也　総合企画部企画担当課長

２：区長挨拶

本日は国民の祝日にも関わらず、貴重なお時間をご提供いただきまして、グループ毎に中間のまとめということで発表していただきます。既に概要につきましてはお手元に資料を配

布をさせていただき、私も大方目は通させていただいております。7 月の暑い時期に公募の形でお申し込みをいただき、この委員に応募をいただきまして、6 回、7 回もの議論を重ね、グループ毎に色々と貴重なご意見を頂戴してきております。

私どもは議会制民主主義の形態の中で、区議会議員の皆様がおいでになり、19 万 1500 人に膨れ上がった区民のご意見を議会の場で議論を重ねていただき、必要な条例や予算案、決算案の審査をしていただくというのが本来的な形であります。一方、私ども理事者側は、直接選挙で選ばれた私が執行部の責任者として、皆様の貴重な税をどのように使わせていただくか考え、実行していく努力をいたしているわけであります。しかし、それで十分かと言えば、そうではない。一番の理想はやはり、直接民主主義の形をとるということで、それこそが住民の幸福につながるという客観的な研究も、直接民主主義の形をとっているスイスあたりで既に出されております。私どもの区は、都内でも下から数えて 3 番目くらいの約 10k ㎡という大きさの地域で、19 万ほどの人口を抱えております。政令指定都市に準ずる権限を持たせていただいている 23 区としては、どういう形で住民の皆様のご意見をできるだけ正確に頂戴していくか、ということを工夫していく努力を執行側は片時も忘れてはいけない。そのように考えまして、この区政改革懇談会という仕組みを作らせていただいたのでございます。

私自身は区長就任以来、今日で 1 年と 10 日ほどでございますけれども、就任に際して「区政は区民を幸せにするシステムである」というドメイン、すなわち仕事の領域を決定しました。そして 2 年度目は区民の皆様に愛情をもって接していく、という職員の養成をしたいということを考えているところであります。

私どもの会計では 753 億円の当初予算も、区民税で直接補える財源は 110 億円程度しかございません。753 億円引く 110 億円ということになれば、約 640 億円のお金をどこからか捻出してこなければいけない、というのが荒川区の財政の実態であります。しかし、今年度は昭和 56 年以降はじめて財源不足を補うための基金から繰り入れを行わずに予算を組むことができましたし、これからもその姿勢は崩さないでいきたいと思っております。

では、この 100 数億円の税は、すべての義務を負っている方が完納しておられるかと言えばそうではなく、滞納していらっしゃる方もかなりいるというのが現状です。また、国民健康保険においても然りです。このような状況の中で年々行政改革をし、職員の数を減らし、現在は 1700 人を切りましたけれど、今年度は来年度に向けて、23 区で共通の人事委員会の方針を出しまして、年額で平均 5 万円ほどの給料の削減を職員全体にかけることを昨日組合と交渉して妥結いたしました。北海道では職員の年収を平均 110 万円ほど削るということですが、私どもはまだ幸いそこまでの状況ではございませんが、この長く続いた平成不況を受け、区を預かる私としてはひと時も油断することなく、しっかりと税を効率的に使っていき

たいと考えております。そのためにも区民の皆様のご意見を大切にして参りたいと思っております。どうぞご理解をお願い申し上げます。

今日は会の始まりにご注意をいただきました。私どもが紛らわしい表示をして4階と5階を間違われ、長くお待ちになられた方がいらっしゃいました。改めましてご迷惑をおかけした皆様に対しまして私からも深くお詫び申し上げます。そういうことからも仕事をやりすぎて叱られるというならともかく、不備でご注意いただくことのないように、職員を監督してまいりますのでご寛容を賜りますよう、特に、皆様にお詫びを申し上げたいと思います。

区としてもこれから色々なことをやってまいりますが、どうか皆様方あたたかいご意見を、重ねて区政にお寄せ賜りますようにお願いを申し上げまして、挨拶とさせていただきます。重ねて休日にお出ましをいただきましたことを御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

３：グループ発表

（グループ発表と資料は各グループのページに掲載します）

４：区長コメント

お疲れさまでございました。

全てのグループの皆様の真摯なご討議の成果を中間地点でまとめた発表を承りまして、本当に今、ここにおります助役、収入役、教育長、いわゆる特別職といわれる諸君と異口同音にやってよかったなあ、というか、やらせていただいてよかったなあ、と話をしました。皆様にすれば、参加して努力して、どう行政が受けとめて実行していくのか、そして政策評価をどのように行なっていくのかということについては、今後さらに後半の、マラソンでいえば折り返し地点、そして復路、ここでひとつまた大きくまたまとめていただきまして成果物を頂戴し、これを区の憲法といえる基本構想にしっかりと反映するように、私どもとしては真摯に受けとめて参りたいと思っております。

率直に申しまして、特に教育について一部に誤解があるご意見があると、申し上げたい部分もなくもありません。しかし、それは後ほど所管の部課を通じてご報告をさせていただきたいと思います。

日本能率協会総合研究所という、この種のリード役としてわが国のトップを走っておりますコンサルタントの皆様にご参加をいただき、はじめのリード部分、交通整理をしていただいて、まことに立派な資料を頂戴できたと思います。

今日いただきました資料は、「イキ」という本当に洒落た切り口もあれば、ご謙遜でございましょうが、井戸端会議、こういう井戸端会議が江戸時代から続いたから日本はこうなったのかな、と思うくらい高級なものでありましたし、それと、ただいまの、第一線を引かれて、今ご経歴を拝見すると全員無職と、おひとりだけが会社顧問という、最後の山吹グループのお言葉などは含蓄に富んでいて、一つ一つは申し上げませんが全グループがすばらしく、それぞれのグループの皆様の本当にすばらしい成果だと思います。

私が冒頭に申し上げようと思っておりましたが、できるだけ短い時間でご挨拶を申し上げ

た方がよいと思って省略させていただいたのですが、先ほど桜井先生のお話の中で月尾嘉男東京大学名誉教授の話がでました。私どもは荒川に「グロスアラカワハピネス(Gloss Arakawa Happiness)」という概念を導入していきたいと思っております。これは社会科学的に言うと、精緻な学問の論証に耐えるようなものでは決してありません。そのことを最初にお断りしておきます。きわめて情緒的で包括的なものです。

これはつまり人の幸せというものは個人の中に内在するもので、これを客観化することは予定されていない、自分の幸せを人にどう評されようと別にそんなことは何の関係もないということでございます。生活領域全般にわたって笑顔が増えている、これだったら区民の皆様の笑顔が増える、そういうことをこれから区の職員を先頭に立ててやっていきたいと思います。

先ほどのお話にもありましたが、区役所の職員の中に行政感覚というのはきっとあると思います。私も政治家としては長い経験を積みましたけれども、行政としてははじめて荒川区役所に参りまして、私流の表現では「文化の違い」と申しておりますけれども、先ほどのお話のようなことはあると思っております。そして早くこの壁を低くして、相互が理解しあえるものをやっていきたいと思っております。

「グロスアラカワハピネス」についても、例えばこういう調査がございます。わかりやすく言えば昭和33年から平成３年まで33年間に日本の経済は６倍に増えた、国民所得も６倍になった。しかし、あなたは幸せですか、生活に満足していますかという問いに対しては昭和33年と平成3年では何も変わっておらず、同じ、という政府統計があります。これは国際的に認知された統計として残っています。

確かに、経済が豊かになり、所得が増えればそれはある程度その瞬間は幸せだと思うかもしれない、しかし、限界効用が働き、もう少し稼ごうという気になれば、それが到達できなかった時はむしろ不幸な感じを持つ、ということが実証されております。私どもはものではない、合理的に私利私欲を追及する経済人をわたしたちは良しとしない。やはり人間にとっては使命感とか、他の方々に対するあたたかい思いやりであるとか、こういうものをひとつの自分たちにおいては絶対的な価値観として追求していくという生き方があるだろうと思っておりまして、そういう世界を私たちは区政を通じて、区民の皆様にお届けできればいいなと思っているのでございまして、私たちはそのような荒川区を目指していきたいと思っております。また、今日賜りましたたくさんのご意見は、本当に大切にしていきたいと思っております。

特徴のない区という率直なご指摘がございましたが、たぶん当たっているのだろうと思います。例えば大田区をみたら京浜工業地帯の中心だということが言えると思います。文京区を見たら東京大学があって、「文の都」と自らおっしゃっていますけれども、そういうイメージがあります。私たちは荒川区をなんとなく中途半端な、工業地帯としても政府統計のその他の分類に入る製品を作っている。また、大学ではやっと首都大学東京の保健科学部ができた、またはこれから航空高等専門学校は産業のための専門学校に大学院を併設した学園に育って、新産業のロボットでありますとか、または、高齢者向けの医療系の、メディカル系のテクノロジーを育てていくとか、つくばエクスプレスの開通によって学園都市と連携をして

いくとか、いろいろ可能性が出ているわけですけれども、しかし、どうも学問が盛んだとは思えません。

しかし一方で、先ほどもお話がありましたが、具体的に言えば、市川先生のご実父である、入山初太郎先生は、かつて我が国の無形文化財として、筆を作らせたらこの人の右に出る人はいないという人でした。大勢の優れた芸術家が入山初太郎さんの作った筆を求め、そして長くご活躍をされましたが、全国に轟いて政府から何回も、労働大臣や文部大臣を中心に表彰を受けられた。そのような優れた芸術を支える職人さんがたくさん区内にいたはずなのです。つまり、江戸時代からの伝統が今でも息づいているはずなのです。

そしてこの間私たちは、佐藤産業経済部長も出席しておりますが、少し税金を使わせていただきまして荒川区の産業をマトリックス調査で分析しましたら、なんと区内の 35 の企業がこのまま全国に通じるレベルの技術を持っているということがわかりました。これをもとに荒川区の産業興しができないかと私は思っております。

長くなりましたが、以上で今日の私の大それたコメントなどということではなく、感想を申し上げさせていただきました。ご苦労を本当におかけしたなあ、という思いと、しかし、そのことは確かに皆様の大切な荒川区の将来の指針をつくる際に極めて有力な手がかりであり、目標であり、道しるべであるということも思っています。どうぞ後半も御尽力を賜りますことを心からお願い申し上げまして、コメントとさせていただきます。ありがとうございました。

５：グループ討議

各グループごとに、中間報告会の反省、今後のスケジュールなどを討議。

６：閉会

これで荒川区区政改革懇談会　中間発表会を閉会します。

以上